



令和六年度 羽島市社会人権教育推進事業

「人権作文コンクール」

優秀作品集



「人権作文コンクール」優秀作品集

私たちは、幸せで明るい社会で暮らしたいと願っています。また、人権侵害のない明るい社会の実現は、私たちの永遠の願いです。しかし、私たちのまわりを見ると、まだまだ保障されているはずの基本的な人権が侵害され、偏見や差別に苦しんでいる人がいます。

「人権作文コンクール」は、このような社会の中で、児童・生徒一人ひとりが、今自分たちのまわりで人権に関して何が起きているのかを見つめ直し、自分たちは何をしなければならないのかをじっくりと考えてもらうために実施しました。

この作品集は、たくさんの応募作品の中から、特に優秀とされた児童・生徒の皆さんの作文を掲載したものです。子どもたちの人権に対する考えに耳を傾けていただくと共に、人権教育に関わるさまざまな場で活用していただければ幸いです。

【応募概要】

1. 作文内容

日常の家庭生活や学校生活あるいはグループ活動などの中で得た体験を通じて、基本的人権を守ることの重要性、必要性について気付いたこと、考えたことなどを題材とする。題名は自由。

2. 募集対象

市内の小学校、義務教育学校、特別支援学校小学部に在籍している5・6年生及び市内の中学校、義務教育学校7～9年生、特別支援学校中学部に在籍している生徒に相応する学籍または年齢にある者。

3. 応募総数

62点

(内訳)

小学5年生及び義務教育学校5年生	23点
小学6年生及び義務教育学校6年生	30点
中学1年生及び義務教育学校7年生	6点
中学2年生及び義務教育学校8年生	1点
中学3年生及び義務教育学校9年生	2点

4. 審査員

羽島市社会人権教育推進協議会委員10人、生涯学習課長

5. 賞の授与等

最優秀賞2点、優秀賞4点、入選14点

入賞者に表彰状と副賞を授与、最優秀賞及び優秀賞作品を人権作文集に掲載

※作品の掲載に際して、作品内の個人が特定できる情報などは、作成者に確認のうえで修正または削除しております。ご了承ください。

目次

最優秀賞

わたしの妹

竹鼻小学校五年

黒田 和奏

1ページ

おばあちゃんに私が出来ること

中島中学校三年

野村 琉花

2ページ

優秀賞

広がれ「あったかハート」の輪

竹鼻小学校五年

木村 美結

4ページ

個性を大切にするということ

正木小学校六年

大西 悠真

5ページ

個性を認め合おう

竹鼻小学校六年

林 史彩

6ページ

苦しみから学んだ人権

中島中学校三年

河合 慶悟

7ページ

(敬称略)

最優秀賞

わたしの妹

竹鼻小学校 五年 黒田 和奏

みなさんのまわりには障がいがある方はいますか。わたしには、障がいがある五才の妹がいます。妹が産まれた時、お母さんは障がいがあるということを知って泣いていたことがあったそうです。妹はふつうの赤ちゃんとは少しちがって、体も小さく、二才になってもまだ言葉を話せず、自分で立ったり歩いたりすることもできませんでした。目も弱くて一才前から度の強いメガネをかけています。

妹はできないことも多いです。いっしょけんめいがんばってもはつきり言葉を話すことはできませんが、わたしには何を言っているかが分かるようになりました。だから今ではわたしは家で「通訳さん」とよばれています。言っていることが分かってからは妹とボール投げをしたり、お人形で遊んだりする時間が楽しくなりました。妹のおかげで特別支援学級の子と話す時もその子が言いたいことが分かるようになり、友達がたくさんふえました。

妹とはけんかをしてはらが立つこともあるけれど、妹の寝顔や泣き顔、大好物のみかんを見て喜ぶ時の顔を見るといやされるし、やっぱり妹が一番かわいいなと思います。でも妹と歩いているとじろじろと見てくる人がいていやな気持ちになることがあります。友達からも、

「体、小さいよね。」

「なんで小さいのにメガネかけているの。」

といういろいろな言われて、正直に障がいがあることを伝えようか、ごまかそうかまようかがあります。でも、やっぱり本当のことを伝えたい方がいいかなと思います、伝えると受け止めてくれる子もたくさんいるので、伝えてよかった、知ってもらえてうれしいなと思います。

妹は体が弱くて通院や入院が多く、まだまだ手がかかることも多いので、わたしは自分の気持ちや言えず、お母さんにあまえられないこともたくさんあります。そして、妹のことで友達に何か悪口を言われるのではないかと不安になることもあります。でも、妹は来年から同じ小学校に通うかもしれないので、今から楽しみな気持ちも持っています。

わたしは、妹が産まれるまで障がいのことを考えたことはありませんでしたが、妹と生活して障がいのことを深く考えることができました。わたしの家では障がいは個性だと考えています。障がいは特別なことではありません。障がいがある方がこまっていたら助けてあげることがとても良いことですが、障がいがあるからといって特別なあつかいをしたり、いやなことをしたり、言ったりすることはしないでほしいです。そして障がいについてみんなが正しく理解して、やさしい世の中になるといいなと思います。

おばあちゃんに私が出ること

中島中学校 三年 野村 琉花

「あんたは、ゆかちゃんかね?。」

私には、九十三歳のひいおばあちゃんがいます。おばあちゃんの家遊びに行くと、このように毎回聞いてきます。「違うよ。琉花だよ。」

と答える時もありますが、それも面倒くさくなり、「あはは。」と愛想笑いで済ませてしまいます。するとおばあちゃんは淋しそうな顔になってしまいます。先日おばあちゃんとお墓まいりに行きました。おばあちゃんは常に歩きづらそうです。外へ出かける時は、家族の誰かが手をつないで一緒に歩いたり、カートをひいたり、食事の時おばあちゃんの分は食べやすく小さく切ったり、やわらかくしたりと、何から何まで多くの助けが必要です。そんな時おばあちゃんは、

「おばあちゃんと一緒だと、みんなに迷惑かけちゃうね。私は家にいた方が良かったね。」

と言っていました。そんな事を思わせてしまつては、だめだと思いました。私は、

「そんな事ないよ。」

としか言えなかったです。そして、悲しい気持ちになりました。私はおばあちゃんとはたまにしか会わず、何と声をかければ良いのか。何を手伝えれば良いのか、何も分かりませんでした。そこで私は、高齢者についてもっと知りたいと思いました。

高齢者について調べると、おばあちゃんは認知症を患っているのだと知りました。もの忘れ、同じ話を繰り返す等です。また、認知症の方に言つてはいけない言葉がありました。①否定する言葉②強制する言葉③急がせる言葉④尊厳を傷つける言葉⑤激励し過ぎる言葉です。私は知らず、「違うよ。」と否定する言葉を言つてしまいました。知らないのは怖いことだと思います。高齢者には、何度も同じ事を聞いたり話したりすることがあります。それは、初対面の人と認識し、聞いたり話したりしていると思つているそうです。話すときは否定からではなく、おばあちゃんのことを理解した上で関わつていきたいと思っています。

「あんたはゆかちゃんかね。」

とこれからも何度か聞かれると思うけれど、

「私は、琉花だよ。」

と笑顔で答え、会話をし、一緒にいて楽しいよ。と思つてもらえるようにおばあちゃんに寄り添つていきたいです。

日本では、平均寿命の大幅な伸びや少子化等で人口の四人に一人が六十五歳以上の者となっています。このような中、介護者等による身体的、心理的虐待といった高齢者の人権問題が、大きな社会問題となっています。今では、自宅や施設、病院など場所を問わず、様々な所で起きているそうです。誰もが直面する介護問題、将来介護する側、そして、される側になります。「家族の介護に疲れた。」と言う人は多いようです。虐待をしてしまう人や環境は、負担が多かったり、一人でかかえこんだりして、介護する側、される側双方との意見が合わなかったりと、お互いストレ

スがたまり、虐待が続いてしまうのだと思います。このような問題を未然に防ぐために、頼れる人への相談、専門的なサポートを受けることが大切だと思います。介護者の負担を分けて減らせられたら、虐待は減っていくと思います。そして、地域の人たちと交流をし、私たち中学生と高齢者が触れ合える機会が増えればいいなと思いました。高齢者のことをもっと深く理解し、おばあちゃんの気持ちをよく考えて接していきたいと思います。そして、おばあちゃんに元気で幸せでいてほしいです。そのために、私たちが今出来る事を考えて生活していきたいと思いました。

優秀賞

広がれ「あったかハート」の輪

竹鼻小学校 五年 木村 美結

「言葉」は私たちの生活に欠かせないものです。「言葉」は自分の気持ちを伝えたり、自分や相手を嬉しい気持ち、あたたかい気持ちにしたりすることができます。

私の学校では、「あったかハート」という取り組みがあります。「あったかハート」は、仲間の良かった姿を書いてポストに入れると、書いた相手に届くので、すごくいいなと思った気持ちを相手に伝えることができます。この前、私にも「あったかハート」が届きました。「ソーラン節リーダーとしてがんばっているね」「一生けん命がんばる姿がいいよ」「がんばっておどつていいね」と、書いてありました。私はすごく嬉しかったし、心がとてもあたたかくなりました。私は運動会でソーラン節をがんばりたいと思ったので、ソーラン節リーダーに立候補しました。でも、リーダーとしてクラスのみんなを引っ張ることができているのか不安でしたが、がんばっている姿をクラスのみんなが見ていてくれてすごく嬉しかったし、「絶対に成功させるぞ。」という気持ちになりました。

しかし、言葉は包丁のように相手をきずつけてしまうこともあります。私自身も友達に冗談で悪口を言われたこと

があります。その時は一緒になって笑って終わったけれど、心の中ではすごくいやな気持ちになりました。その言葉は今でも忘れません。私は自分も相手のことをきずつけていないかとふり返りました。ふり返って見たら、私も冗談で「ばっかじゃないの。」と言ってしまったことを思い出しました。その時友達と一緒に笑って笑っていたけれど、本当は心の中で泣いているんじゃないかと気づきました。すごく後悔しています。

テレビでいじめのニュースが問題になっています。私はこのニュースを見てすごく悲しい気持ちになりました。いじめをされた子はすごく悲しくなります。冗談やからかって言った言葉だとしても、相手がいやだと思う気持ちは変えられません。自殺まで追い詰められた子の気持ちを考えると、すごくむねが苦しくなります。

一度言ってしまった言葉は取り消せません。謝っても相手の心に一生残ります。言葉の選び方によって相手の気持ちは変わります。なので言葉を話す時には、その言葉が適切なのか考えてから行動に移すことが大切です。人には必ず良いところがあります。相手の良いところを見つけて認めていきたいです。この「あったかハート」という取り組みが竹鼻小だけでなく、もっと色々なところに広がって、みんながあたたかい気持ちになれる世の中にしていきたいです。

個性を大切にすること

正木小学校 六年 大西 悠真

「みんなちがって みんないい。」

ぼくは、人権という言葉聞いてこの言葉が思いうかびました。なぜなら人権とは、全ての人が一人一人幸せになれる権利で、人それぞれの個性を大切にすることかなと思ったからです。

その中でぼくは、いじめについて、いじめがなんなのか、いじめのせいでどうなってしまうのかを改めて考えてみました。言葉は、一言で人が笑顔になり、逆にその一言で傷つくこともあります。

ぼくのクラスには二十七人の仲間がいます。その中には明るい子、はずかしがり屋な子、活発な子、いろんな仲間がいます。

運動会の練習の話です。大縄とびの練習の中で、得意な子、苦手な子がいて、練習を重ねるにつれてどうしてもクラスの中でバラつきが起こってしまう、「おい、ひっかかんなよ。」「あっちのチームいけ。」など良くない言葉が飛びかい、一時クラスのふんいきが悪くなってしまう事がありました。当然その言葉は、人を傷付けてしまう言葉です。しかし、何回も練習や話し合いを積み重ねていく中で、得意な子は苦手な子を教えたり、「ドンマイ。」「こうするといいよ。」などあたたかい言葉に変わっていききました。もしもあの時そのままにして悪化していったら、そ

れが積み重なり、仲間外れやイジメにつながっていったらもうなんだろうと思います。だからそうなる前に、一人一人が、まず相手の気持ちになって言葉をかけあったり、意識を変えていかなければいけないと思います。

ぼく自身も、よく妹に傷付ける言葉を言ってしまうことがあります。例えば、妹の勉強を見ている時に、「そんなことも分からの?」「バカ。」「アホ。」などと口にしてしまいました。その時は、傷付けるつもりはなかったけど、後から妹の立場になって考えてみると、頑張ってるのにひどいことを言ってしまったと反省しました。他にも知らない間に、友達に対して傷付ける言葉を言ってしまったかもしれないです。

言葉を話す前にはまず、相手の気持ちになって考えて発言をしていくと、みんながいやな気持ちにならないと思います。そして、みんなが一人一人の個性を認め合い、笑顔あふれる日になるといいなと思います。

ぼくはこれから人と話す前にまず、相手がいやな気持ちにならないように、相手と目を合わせて向き合い、話をするようにしたいです。

「みんなちがって みんないい。」

その言葉を大切に、楽しい学校生活を送りたいです。

個性を認め合おう

竹鼻小学校 六年 林 史彩

「差別をやめよう」

みんな口を揃えてそのようなことを言うけれど、そんな人でも、本当に差別しない人はほとんどいないと思っています。

差別には、色々な種類があります。例えば、男女差別、障がい者差別などです。どうして、そのような差別が起こってしまうのか、それは、「自分と違うから」だと思っています。自分とは違う性別、自分と違って障がいがある、自分とは反対の性格、このような自分と違う「個性」を持っていると、あまり関わりたくないと思うことで、差別が起こったり、その差別によつて、嫌な思いをする、いわゆる「いじめ」を引き起こす場合もあります。「自分は差別なんかしない」と思っている人でも、頭の奥底で、男だからこう、女だからこうという先入観を持っている人も多いと思います。だから、差別は良くないと思っていなくても、本当に差別しない人はほとんどいないと思っています。

最近では、差別が問題といわれるようになり、多様性が認められるようになりました。例えば、昔は、中学や高校の制服は男子と女子で決まったものを着ていました。けれど、現在は、色々な制服を自由に選べる学校が増えていきます。なので、男子がセーラー服やスカートを着ても良いし、女子が学生服やズボンを着ても良いです。けれど、例えば、

男性が女性用の服を着ている人がいるのを見かけました。それを見て、どう思いますか？「変だな」と思う人もまだいると思います。それは、やっぱり、性別の先入観が抜けていないからだと思っています。

私は、現在の差別の問題は、「性別や障がい者に対する先入観がまだ完全になくなっていない」ということだと思っています。実際、私自身も、差別は良くないと思っていますけれど、やっぱり、差別をしてしまっているところがあると承知しています。このまま、差別をしていると、誰もが自分らしく、幸せに生きることができません。なので、多様性を尊重するべきです。けれど、私たちがそのような意識がまだできていないから、完全に差別はなくなっていないし、完全に多様性が尊重されていないと思います。

これから、差別をなくすためには、誰もが持っている「個性」を認め合うことが大切だと思います。みんなの個性を認め合い、受け入れるという意識を持てば、誰もが自分らしく生きることができます。どうしても苦手な人でも、その人の考え方などを肯定していくことが個性を受け入れるためには必要です。どんな人でも、得意なことがあれば、得意なこともあり、好きなことも、嫌いなことも違います。そんな人それぞれの「個性」をしつかりと認め合い、受け入れていくことを、まずは、意識するのが大切だと思います。私も、人それぞれの「個性」を認め合い、受け入れる意識を持ち、多様性を尊重して、これから生活していきたいと思いました。そして、本当に差別しない人になりたいです。

苦しみから学んだ人権

中島中学校 三年 河合 慶悟

あ、また今日も……。朝起きると気持ち悪い。そして嘔吐。今度はひどい頭痛。小学四年生の夏休み明けから急にこんな日が続いた。それでも学校へ行く。保健室で体調を整え、保健の先生から嘔吐したとき用の袋に内緒の見えないメッセージを書いてもらって、お守り代わりにポケットに忍ばせて教室に行く。体調が悪くなると保健室へ。こんな毎日の繰り返し。僕の身体はどうなってしまったのだろう……。毎日続く体調の悪さに辛くてしんどくて、どうすることもできなかった。ただ学校に行く、それだけの事が本当に本当に苦しかった。

それから母と一緒に病院や相談できる場所を探しては駆けずり回った。なぜこのようになったのか、簡単には紐解けなくて、病院の先生や専門家の指導やサポートを受けた。

それでも僕の身体が僕の身体ではなくなっていった。毎日身体が動かず遅刻したり、どうしても動けないときは休んだりしながらも、ずっと学校に行こうと必死で頑張ってきた。しかし、六年生の一月を過ぎた頃、心も身体もボロボロになり、限界はとうに超えていて、本当に学校へは行けないと思った。教室にも保健室にすら行くのが苦しくて、もう僕の行ける場所はなかった。当時、学校で一番信頼していた校長先生に自分の口でその事を話しに行った。校長先生は少し寂しそうな顔をしながら、それでもこんな僕を

受け入れてくれた。校長先生の前でただただ涙が溢れた。最後はダメだと分かっていながらも、校長室登校をお願いした。慶悟さんが学校に来れるならいいよ！と言ってくれた。校長先生の決意はとてもビックリしたが、今でも感謝しかない。校長先生は毎日忙しくされていながらも、卒業式の練習と一緒にリモートで見たり、掃除時間は僕が校長室をピカピカにしたり、とても不思議な時間だった。最後は校長室登校から教室へと少しずつ行けるようになり、何とか卒業した。そして中学生になり、いろんな決意を胸にずっと今でも学校に行けている。

こんな暗く長い長いトンネルの中にポツンと一人で取り残されていた僕を見守ってくれて、待っていてくれて、時には手助けをしてくれたのは、周りにいた多くの人達だった。

帰りに保健室にいる時、荷物をランドセルに詰めて持ってきてくれる子がいた。土日の野球の練習に行くとコソツと明日学校へ来いよ！と声をかけてくれる子がいた。別室でリモート授業を受けているとき、僕の書いた意見に意見をくれる子が何人もいたときには驚いた。そして、中学生になり毎日一緒に学校へ行く友達がいる。部活に励む仲間がいた。

仕事もあるのに毎日毎日続く体調不良に付き合ってくれた両親。学校を休んだ日は様子を見に来ておかゆやうどんを作ってくれた祖父母。そして、校長先生をはじめとする小学校の先生方、中学校になってからも担任の先生を始めとする多くの先生方にはたくさん声をかけていただい

た。今僕がここまで前を向いていられるのは、本当に多くの方に支えていただけたからだ。感謝の思いばかりが溢れてくる。

そして、中学三年生になり、こんな僕が中島中学校の生徒会長になった。立候補すると決意したとき、一番驚いたのは僕の両親だった。生徒会長になろうと思った動機は、ずっと辛くてしんどかった経験からだ。中学校で同じような思いをしている人がいても、きつとその子を助けることも手をさしのべることも簡単にはできない。それならせめて、学校に来ている間は少しでも楽しめる時間やホッと息の付ける時間があるといいなとそんな学校にしたいと思った。今、少しでも笑って過ごせる学校になるよう僕なりに努力している。

なぜ学校に行く必要があるのか？この何年もの間、何度も何度も考えた。それは、学校という社会の中で生きるのに必要な事を学び経験するためではないだろうか。仲間との関わりの中でお互いの存在を把握できる。自分自身の存在価値を見いだせる。学校に行くだけで充分だと、一人一人が生きていけるだけですごく価値のあることだと思う。

僕が辛い経験を乗り越えて、今思うこと。人が抱えている問題がそれぞれにある。そんな人たちが苦しくて立ち上がれないときに何が出来るのか。きつと簡単に何か出来ることなんてない。しかし、話を聞くことは出来る。寄り添うことは出来る。見守ることは出来る。隣にいることは出来る。いつか自分自身の苦しみに自分で納得することが出来る日がくる。辛い思いをしてきた分、必ず前を向ける日

がくる。自分の経験からそう思う。

どんな国籍、性別、住んでいる地域、障がいの有無や考え方、様々な方との繋がりの中で一人一人を大切にしていきたいと思う。

羽島市市民協働部

生涯学習課

羽島市竹鼻町 55 番地

TEL 058(392)1111

令和 6 年 12 月